

季刊 22 0904
quarterly
machizukuri

まちづくり

●特別企画—コミュニティビジネスの成功要因を考える
●地域探訪22—住民たちの都心再生



●町並みインタビュー—市村次夫「産地から王国へ」
●地域レポート—兵庫のまちづくりい地域づくり

特集

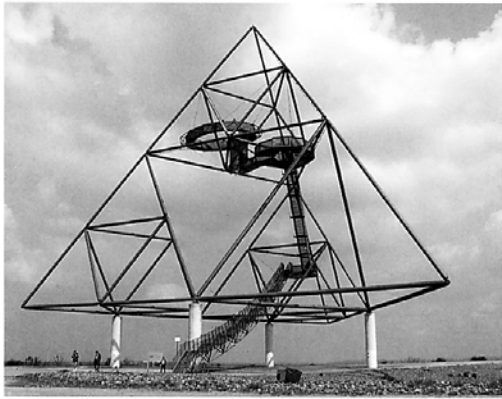
観光立国時代の 地域づくり

炭鉱遺産で地域の再生

ドイツ・ルール地域と日本・空知産炭地域

ルール地域／産業遺産の活用

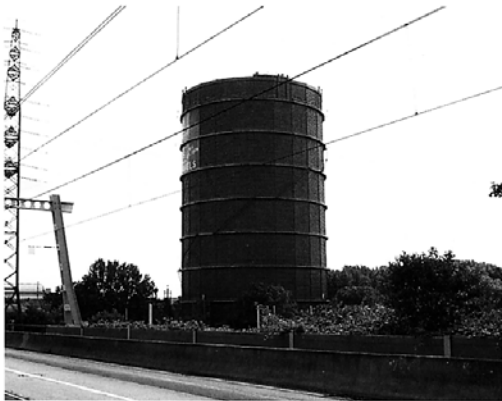
(1) エムシャー川に沿ったランドマーク
ルール地域を西流するエムシャー川に沿って歩くと、高さ100m程度の小山を随所に見ることができ
る。これは、石炭と一緒に掘り出される岩石を積み上げた人工的なズリ



テトラエーダー

山(ボタ山)で、長年の石炭生産を象徴している。

ボットロップにあるズリ山には、高さ60mの「テトラエーダー」という三角錐の巨大なモニユメントが置かれていて、エキスパンドメタル張りの階段で45mの展望台まで登ると、鉄骨構造によるフワフワとした



ガソメーター

揺れと相まって、迫力は満点だ。

そこから見渡すと、ひととき巨大な円筒が目につく。ウーバーハウゼンの製鉄所の一部であったガスタンク「ガソメーター」である。内部は高さ100mの展示空間になっており、毎年一つのインスタレーション(架設展示)が行われている。特に



デューイスブルク北景観公園

吉岡宏高(札幌国際大学観光学部准教授)

注目されたのは、1999年のクリスト&ジャンヌクロードによる「The Wall」という13000個のドラム缶を積み重ねて高さ26mの壁を作った展示で、6カ月の会期中に36万人が来訪した。

ガスタンク屋上から西のデューイスブルク方面を望むと、巨大な製鉄所の高炉や工場が建ち並ぶ姿を見て取れる。旧マイダリッヒ製鉄所は、生産施設をそっくり残して、200haの「デューイスブルク北景観公園」として生まれ変わった。高さ85mの高炉から全体を俯瞰でき、貨車から落とした鉄鉱石を貯蔵するホッパー(貯槽)の壁では登山クラブのメンバーがロッククライミングの練習をしている。週末の夜は、ダニーカラパンのデザインによる工場のライトアップを楽しむことができる。

(2) 世界遺産のツォルフエライン炭鉱
世界遺産のツォルフエライン炭鉱は、この地域を代表する産業遺産である。1932年建設のパウハウス様式による第12立坑を中心に、様々な産業遺産が保全活用されている。

選炭工場は、圏域のインフォメーションセンターが設置されているルーレル博物館として、ボイラーは工業デザイン展示場であるレッド・ドット・デザイン博物館として生まれ変わった。コークス工場では、夏はプール、冬はスケートリンクが開設される。ここは、産業文化を巡るトレイルの起点であるとともに、デザインなど新たな産業を興すために、場の記憶をとどめた炭鉱施設が器として再利用されている。

ツォルフェライン炭鉱



(3) 生活環境を再生したルンゲンベルクのズリ山周辺

居住環境の改善も各地で取り組まれており、ゲルゼンキルヘンのルンゲンベルクのズリ山が代表格だろう。310戸の老朽化した炭鉱住宅の再生と、荒れたズリ山の修景が一体的に行われた。建築と土木のトータルデザインによって、質の高い住宅空間が提供され、隣接する古い住宅群にも良い影響をもたらした。夜になるとズリ山頂上からレーザー光線が投射され、光のランドマークと

ルンゲンベルクの夜景



しての役割も果たしている。

ルール地域の産業遺産を生かした地域政策

これらの例は、東西80km・南北20kmのルールのうち、ごく限られたものである。産業遺産の拠点とは、眺望ポイントや住宅群とともに「産業文化の道」としてネットワークされており、全てを巡って歩くには2週間が必要である。

私は、今から10年前に、製鉄所の高炉を背景に鉱石ホッパーの壁をよじ登る人が写った1枚の写真を手に見地を訪問した。どの駅前にも、朝から寝ころんでビールを飲む失業者がたむろし、怖くてカメラを出すことすらできなかった。観光案内所で写真を見せて所在を尋ねても「このような場所は存在しない」と断言され、地図を頼りに探し出しようやくたどり着いた。あれほど人々の心が荒み、過去の産業施設に関心が払われずにいた一帯が、わずか10年ですっかり見違えるようになった。

短期間に地域のベクトルを再生へと力強く導いた要因は、1989

99年に展開された州政府の地域政策「IBAエムシャーパークプロジェクト」によるところが大きい。

長年にわたり自然環境が破壊され続けたエムシャー川の再生とともに、かつて工業生産のために用いた基盤を、新たな時代に向けて再生し活用する経済的・社会的な視点も加味して、地域全体を活性化しようとするものである。その詳細は既往文献^{*}に詳しいが、特筆されるのは分野の専門家による質の高い計画が高い訴求力を持っているということである。産業遺産の活用は、この政策の一環として取り組まれ、アート、教育、産業を創造するための器など、新たな価値が付与され見事に再生した。

訪問者の立場からは、拠点がネットワーク化され明確に示されたことによって、鉱工業で発展してきた地域の歴史的文脈と、石炭・鉄・化学・機械・物流の関係を容易に理解できるようになり、この巨大な工業エリアを見て回る手がかりができた。それは、知的好奇心の旅の入口でもある。

これまでガイドブックに掲載されていなかった地域が、1999年のIBAプロジェクトのフィナーレには延べ350万人が来訪（うち半数が地域外から）するまでになり、以降も確実に来訪者は増加している。

空知地域／なぜこうも違ってしまうのか？

ルールと同じ境遇にある北海道の空知地域で育ち、故郷の地域再生の手がかりを模索してきた私にとって、最大の関心は「同じ文脈にある地域が、なぜこうも違った道歩んだのか」ということにあった。

両地域とも、石炭産業によって発展した歴史も面積もほぼ同じである。空知の産業遺産と同様に、ルールでも初めから残そうとしたのではなく、壊すことができず放置されていた。

最も大きな違いは、空知では石炭を移出するだけで他の産業が育たなかったが、ルールは石炭から鉄鋼へと川下展開しドイツ随一の重工業地帯を形成したことだ。その結果、両者の人口規模には10倍以上の差があ

り、一概には比較できないことは確かだ。だから空知では、ルールと同じことをしようとは思わないし、同じことができるはずがないことは承知している。

それにしても、毎回の訪問で感じたのは、両者の決定的な違いが、単に規模や政策の質だけに起因するのではなく、もっと根底に何か大きな要因があるのではないかということであった。

空知で炭鉱遺産の再生に関わる仲間とともに、10年にわたって注意深く現地を見て歩いてたどり着いた結論は、決定的な違いはパラダイム（世界観）にあるということであった。ルールでは、華々しいプロジェクトの根底には、「過去を見ずして未来はない」というポリシーと、都市が成長から凝縮へと転換することを見通した新たな価値観の創造という視点があった。そのために、「選択と集中」「ネットワーク」という二つのキーワードの下で、地域全体を網羅するプロジェクトを立ち上げ、産業のために蓄積した社会基盤や施設に新たな価値を加え、次世代

の方向性を具体的に明示することに投資した。

一方、空知が一貫して追い求めたのは、「炭鉱の暗い過去を払拭する」ことであった。自らの歴史を否定して覆い隠し、国の石炭政策に頼って、目先の苦境を乗り切るために短絡的に流行分野への投資へと走り、カネを費やして過去の遺産を壊し続けた。補助金支出を正当化する多くの構想・計画が策定され、マウントレースイ大規模リゾート（夕張市・計画総事業費300億円）、星の降る里カナディアンワールド（芦別市・同45億円）、地下無重力実験センター（上砂川・52億円）など、計画事業費で約1000億円にのぼるプロジェクトに着手したが、そのほとんどが破綻や中止に追い込まれた。また、最後まで炭鉱が残った夕張市など5市1町というエリアの枠組に固執したが、相互連携の成果は限定的で、各自自治体による個別の取り組みに終始した。

結局、空知は、ジリ貧を避けようとして、下手な投資でドカ貧に陥ってしまった。足もとに由緒と価値が

ある備前焼があるのに、単に古いものだからと何も考えずに壊し続け、補助金で百円ショップから安物のカップを買いまくってきたようなものだ。備前焼は、見せても茶をたてても価値があるが、安物のカップはいくら数があっても価値を生まない。夕張のロボット館、芦別に突如出現したカナダ、歌志内なのにチロル：などはその代表例と言える。

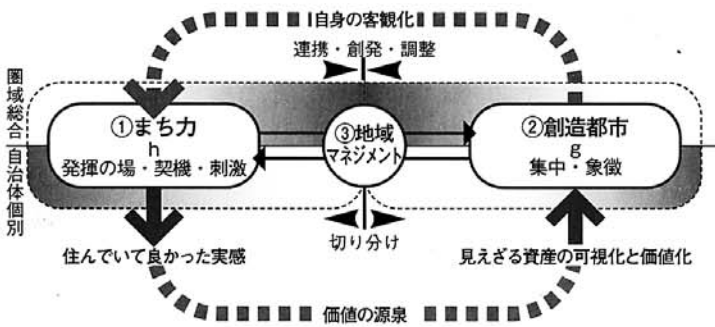
空知の姿をルールに投影して得ることができたのは、「過去の蓄積に、今日的な価値を付与すれば素晴らしいことが実現できるのだ」という励ましと、根本となるパラダイムの問い直しであった。腐った土台に家を建てても、家はすぐ崩れてしまう。空知でまず必要なことは、アイデンティティーの確認と地域の誇りの回復、それを実現するための道筋の提示だということを実感した。

空知での取り組み

(1) 目下の急務は誇りの回復―観光まちづくり

誇りを回復するため最も効果的なのは、人に自慢することである。自

図1 全体構造



慢するには相手が必要だが、それには外の人の眼差しが不可欠だ。空知では、長年にわたって「炭鉱は暗い」と唱え続けてきたため、新たな着想を得ることができないほど思考が固着している。さらに、地域外との繋がりは国・北海道・市町という行政ルートだけで、それも補助金目当てしかなかったことが、ますます視野を狭めていた。

地域の自発力を生み出すためには、様々な階層・局面で外からの刺激を受け、自ら考えることが構造化されなければならぬ。そのための最も効果的な手段として観光がある。

しかし、従来のイメージで観光を捉えてしまうと、「たくさん人を呼んで」「たくさんカネを落とさせる」といった、固定的な発想に陥ってしまう。空知では、大量の来訪者を受け入れる能力はない。観光を事業として展開し、対価に見合ったサービスを展開する能力も低い。すでに様々なモノに投資してしまったので、新規の投資余力は全くない。

このような制約条件を考えると、①地域に残されたものを手がかりに、②外部の人とゲスト＝ホストの関係を超越した選択的な関係を構築し、③外の眼差しから得た刺激を内の誇りに変え地域力を高めるための仕組みを構想するしかない。これこそ、観光まちづくりにほかならないだろう。

すでに限界自治体のように限られた地域に残された時間は限られている。これを実現するためには、最も固有性があり蓄積が厚い炭鉱の記憶をもとに展開するしか道はない。

そのため、展開指針が必要となるが、2007年度から北海道空知支庁の独自事業として、筆者を含む札幌圏の大学教員6名によって、次のような内容で構成された政策の策定作業を行っている。いわばこれは、「IBAそらち構想」とも言えるものである。

- (2)空知の再生政策—基本的な考え方
- 基本的な3点セットを揃え、地域内外の循環を生み出す(図1)。
- ①まち力…市民が地域課題の解決力を持つことであり、かつて炭鉱社会が持っていた強固なコミュニティを再生するためには、市民力を発揮するための場や機会が必要となる。これは簡単に生成されるものではないため、初期段階としては外の力を内部化する。
- ②創造都市…知的好奇心を喚起する素材をもとに、結果よりもプロセスを共有することにより、地域外の人

の注目を集める。そのためには、地域アイデンティティーの鮮明化、それを表現する地域資源の象徴性、先駆的な取り組みの実践が必要である。炭鉱遺産は、そのランドマークとテーマになる。

③地域マネジメント…①のローカルな所作と、②の地域外に打ち出すグローバルな視点での取り組みの相互を、調整・連携し地域内外の動きをマッチングさせる機能である。目指すのは適切な組み合わせによる創造力の発揮であり、①と②を結びつけるための機能と場が必要となる。

②↓①…炭鉱の記憶という見えざる資産の可視化と価値化であり、ヘリテイジツーリズムで具体化される。これまで最も欠けていた外からの眼差しに触れ、自らを客観化する所作を通じて、①の形成を刺激し促進する。

①↓②…①は②の源泉として不可欠であるが、空知では弱体化していることから、後からの対応とならざるを得ない。従来とは異なる価値観を実感できる場を用意する必要がある。

これら①と②は、「鶏が先か卵が先か」という依存的な関係にあることから、どこから着手するかが焦点となる。空知の置かれている状況から、緊急に着手しなければならぬのは、地域外の人が空知に着目し地域内の動きへとつなげる②↓①の仕組みづくりである。

次いで外部の力を内部化する局面では、従来の量的・経済的な観点だけでなく、質的・知識的な観点も加味して捉える必要がある。そのための実践的な「場」と「仕組み」を地域の中で効果的かつ効率的に設定することと、その動きをマネジメントする場・仕組み・組織の整備（特に内外に広く開かれた窓口の明確化）、これらを結ぶテーマとトレイルの設定が重要となる。具体的な展開方策の取りまとめは、アクションリサーチを伴いながら、今年度末までに作業が進められている。

(3) 空知の再生政策—具体的な展開方策

地域外に対して訴求力を持ち、かつ地域内では象徴や場となるための

拠点の設定にあたっては、空知の限られた地域経営資源の現状を考慮して、場所を選択し地域資源を集中投入して取り組む必要がある（図2）。

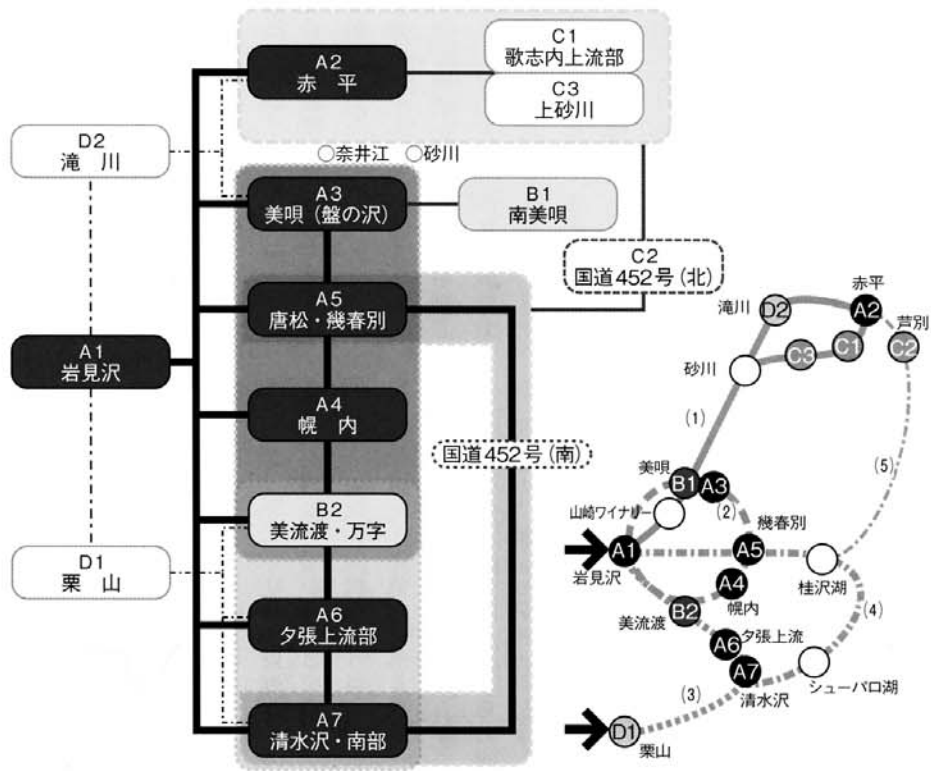
その選択にあたっては、①ランドマーク（アイデンティティの象徴）、②炭鉱遺産の価値（資源の賦存・集積状況、分野のバランス）、③展開の可能性（立地位置、取り組みの蓄積や先導性）という三つの基準で選定した。

検討の結果、14エリアが選定された。これら拠点は一様な重みを持つのではなく、空知全体で「炭鉱の記憶」の表現として空間的な連続性を検討した上で、相乗・補完・代替という関係性によって整序化される。Aは地域の歴史的文脈を表現するため欠かせない拠点で相乗的に機能する。BCは上記Aの補完関係にある拠点で、優先度はBVCとなる。Dはセンター機能を代替する拠点

空知独自の展開を目指して

これまで述べてきた空知の構想は、今年度一杯で取りまとめが終わ

図2 拠点の選定と相互関係



り、2009年度から具体化の段階に入るが、ポイントとなる項目をまとめてみる。

(1) 都合の良い「外の人」がいるのか

1998年度に開始された北海道

三笠市の北炭幌内鉱では、最初に炭鉱が開かれた場の記憶を顕在化さ

継続的に展開されてきた。

空知支庁による独自事業を契機として、空知各地で市民による活動が活性化し、今日まで約10年にわたって



幌内炭鉱景観公園の作業

せようと、市民の手で幌内炭鉱景観公園づくりが継続されている。赤平市の住友赤平鉱では、札幌市立高専（現札幌市立大）の教員・学生が1カ月滞在しアートインスタレーションを展開した。歌志内市の郷土博物館では、財政難による閉鎖の危機を市民による運営サポートで乗り切ろうとしている。2007年には、空知の市民活動を糾合したNPO法人炭鉱の記憶推進事業団も結成された。

これら市民の実践的な活動を通じて得られた知見は、「知的好奇心」が有力な訴求力となり、関心を示す

地域外の層が一定程度存在するということである。その関心の対象は、炭鉱そのものにとどまらず、アート、写真、鉄道、自然、教育など、多岐にわたっている。

(2) 誇りを糧にできるのか

空知の高齢化率は40%前後と高く、これまでは負の要因として捉えられがちだった。しかし逆の面からみると、ほとんどの住民が年金という安定的な現金給付を得ているという点でもある。問題は、これまでは、コストの高い行政に丸投げしていたこと、行政による施策があまり価値を生まなかったことにある。

多くの高齢者が炭鉱と密接に関わって生きてきたことを考えると、炭鉱の記憶を手がかりに社会参加が実現すれば、健康増進や市民事業によって地域全体の費用が低減され、高齢者の持つ記憶や技・経験が価値となって交流が促進されると地域全体の収益が増える。

(3) 地域政策としての合意は得られるのか

ルールでの州政府主導によるトップダウン型の政策展開に対して、空知では、市民からの盛り上がりというポトムアップ型に特徴がある。しかし、このまま地域資源配分の大きな権限を握る行政が動かないと、新たな現実を生み出すことができずに、市民活動に早晚限界が訪れることが予期されていた。

そこで、2005年に空知の首長8名に出席を求めて「炭鉱遺産サミット」を開催した。会議では、炭鉱遺産を手がかりにした地域再生に対して「ネットワーク」「選択と集中」によって「ともに事にあたる」ことが合意されている。

おわりに

空知での地域再生の取り組みは、全国で最もシビアな地域での取り組みであり、具体化には多くの困難が待ち受けている。しかし、高齢化・財政破綻・都市縮小といった空知の苦境は、明日の日本が直面する課題であり、それを先駆的に体現しているとも言える。

さらに空知は、明治初期の炭鉱開

鉱から今日までの短い歴史の中で、成長と没落を体験した。このことは、圧縮された時間の中で高密度に展開された地域の変容と課題を明確に見て取ることができる明快さを有しているということである。そこで暮らす人々の逸話も生々しく、その痕跡を現地で確認することができ、ダイナミックで身近な記憶が価値を持つ。

誇り・経験・反省・歴史・技・生き様……といった見えない価値を、炭鉱遺産といった見えるものに託して表現し、地域再生に向けた構造を定着させようとする空知の取り組みは、いよいよ次のステージに向けて進もうとしている。

● 注釈

- *1 春日井道彦「人と街を大切にすドイツのまちづくり」1999年・学芸出版社、永松栄「IBAエムシャーパークの地域再生」2006年・水曜社
- *2 詳細は「季刊まちづくり」No.8、吉岡宏高「炭鉱遺産でまちづくり」2005年・富士コンテム
- *3 ルールの産業遺産は <http://www.route-industriekultur.de/> 空知での取り組みは <http://www.soratani.com/>